

研究結果報告書

東アジアにおける英雄伝承の比較

所属： 高麗大学校 日本研究センター
役職： 研究教授
氏名： 李 忠 浩

本研究では、「東アジアにおける英雄伝承の比較」という題目のもと、日中韓3国の前近代から近現代に至るまでの歴史、文学、政治、思想などを包括した「英雄伝承」の共通点および差異を把握し、東アジアの文化の独自性と普遍性を明らかにした。

中国から韓国や日本に輸入された羅貫中の『三国志演義』は、両国に伝来すると間もなく同書の英雄たちをパロディー化した作品が登場するほどの人気を博した。そして、日韓両国では同書に登場する英雄にまつわるエピソードや描写に倣う形で、自国の英雄が描写されるようになり、英雄に関する多くの伝説が作られていくなど、同書は両国の英雄伝承に多大な影響を与えた。

韓国において、『三国志演義』は中国から輸入されると同時に出版されるが、朝鮮王朝の士大夫が崇めていた朱子学の大義名分論に即した「蜀漢正当論」を主張する小説として、君臣の忠義を称えた内容が士大夫たちに受け入れられ、教化の書籍として流通した側面があった。

一方、日本における『三国志演義』の流行は、日本への輸入と同文化への適応（日本化）と深く関わっている。日本において『三国志演義』は『通俗三国志』というタイトルで翻訳され刊行されるが、『通俗三国志』は『三国志演義』をそのまま翻訳したものではなく、日本の軍記『太平記』の表現を引用するなど、原典の内容を日本化した上で再生産している。以後も日本においてはこのような通俗小説のテキストから派生した様々な三国志関連テキストが作られることになる。

日韓両国においては、『三国志演義』の流通にともなって、『三国志演義』に登場する英雄たちも人気を博すことになるが、その中でも知略家で忠臣でもある諸葛亮の評価が最も高かった。

日韓両国は、諸葛亮のイメージを単純に模倣するだけではなく、それを自国文化のフィルターを通して自国の風土に合うように再構成することで、自らの感性に合わせて受け入れつつ自国の英雄のイメージとの調和を図った、という側面がある。

例えば、韓国の代表的な知略家である李舜臣と日本の代表的な知略家である楠正成のイメージの形成には、日韓両国で受容・伝播された知略家としての諸葛亮のイメージが影響を与えている。そして、そこには加えて自国の土着的な文化要素も継承されており、それによって各々の国の文化に合った英雄のイメージが形成されていったのである。

諸葛亮や李舜臣、楠正成はいずれも知略家であり、同時に忠臣として顕彰されていることは、日中韓各国の正当論と関連しているが、李舜臣は学者あるいは官僚としての文人が主導する社会であった朝鮮では下級武士に過ぎず、楠正成は幕府の武士が実質的に支配していた社会で、地方の土豪に過ぎない存在であった。このような階級的な限界により、李舜臣と楠正成は支配層と対立構造を成すことになるが、それでも彼らは国のために、あるいは天皇のために命を捧げた忠臣として形象化されている。このように東アジアにおいては、英雄の形象化の過程では国家権力との関わりにおける忠臣の側面が強調されるが、この背景には知略的な面のみでの強調ではなく、民族や国民を団結させる求心力を持った英雄像を作り出すことができないという事情がある。

このように、日韓の例を見ると互いに中国的な要素を享受しながらも、自国の要素を継承する側面が強く作用した結果、異質な英雄のイメージが作り出されていることがわかる。その異質性によって、人物形象と描写にはやや差異が見えるが、これは各々の独自の歴史的土壌の上に多様な成分が輸入され、同じ東アジアの漢字文化圏の中に位置しながらも、独特な英雄の物語が創造されたことを意味しており、その各々の魅力を明確にすることこそは、これからの東アジア文化の比較研究に大きく資することになると考える。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

「『太平記』の想像力と天皇中心死生観の発生」、李忠澁、2014年度韓国日本言語文化学会秋季国際発表大会、2014年11月1日、仁荷大學校

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

- ・「楠正成の七生滅賊と天皇中心死生観の誕生と展開」、李忠澁、日語日文学64号、2014年11月
- ・楠正成と李舜臣関連研究論文は今年8月までに投稿予定。

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)

『日本古典文学に現れた生と死』(韓国日本学会、ポゴ社、2015.2)に「『太平記』の想像力と〈天皇中心死生観〉の発生と展開」の題名で、投稿論文を訂正・補足して掲載。